

## 2017年A Semester 留学報告

教養学部 3年 小林真也

### 学業面

中国語が覚束ない中での留学であり、また当時は専攻や将来像も決定していなかったの  
で、中国語の習得を最優先事項と定め、興味のある分野の授業を手あたり次第に履修する  
ことにした。履修した授業は合計8コマで、そのうち6コマは中国語によるものであった（残  
り2コマは英語での授業）。前期教養時代に比べれば圧倒的にコマ数は少なかったが、最初  
の1,2か月間は肝心の中国語がろくに聞き取れず、学習時間は駒場にいた時よりむしろ多  
かったような気がする。初回の授業で、当時の自分の中国語能力は一学期間の生存すら不可  
能なレベルであることを思い知ったため、毎回の授業で教授の連絡先を訊き、メールを通し  
て授業資料を一足早く送ってもらい、それらを尽くノートに写経してはピンインを振り、言  
葉を学習する日々であった。教科書を使用する授業では予習と並行して読み進めていたが、  
発音の分からない漢字に出会う度に辞書を引いていたため、最初のうちは一時間に一頁読  
めれば良い方であり、忍耐力の良い鍛錬になった。それでも、日本語を母語とするため文字  
を見れば漢字の意味が推測できるのは救いであった。

最初の授業はオリエンテーション程度であり、聞き漏らしてはならないことと言えば連  
絡先やレポート提出期限等の事務連絡が主だったので辛うじて逃げ出さずに済んだが、そ  
んなことよりもっと重要で、もっと難易度の高い仕事が待っていた——言葉の分からない  
外国人に救いの手を差し伸べてくれる、心優しい中国人学生を捕まえて微信を交換する  
ことである。一年半も駒場で生きていれば、「最初の授業で会話がなかった場合、それ以降そ  
の人と言葉を交わす確率は0に収束する」ことぐらいは心得ている。日本にいた時にプロ  
野球のニュースなどを見ていて、外国人選手が「コミュニケーションが上手く取れず、チー  
ムに馴染めず孤独を感じた」などと言って退団していくのを見ては「それしきのことで…  
…」とってしまったのだが、そんな自分を殴りたくなった。

しかし意外とやる気を見せれば何とかなるもので、同じ授業を履修していた人の中に日  
本語に興味のある人がいたり、たまたま隣の席に座った人が自分と同じような留学生で打  
ち解けたりと幸運も重なり、何とかライフラインの確保には成功した。後になって助けられ  
た回数は数えきれない。

何回か授業を受けていると中国語も少しは聞き取れるようになってくるのだが、中国人  
学生と同じ速度で対応ができないため、共同作業のプレゼン準備やクラス討論になるとど  
うしても遅れをとってしまう。これに関しては如何ともしがたかったのだが、教授や中国人  
学生たちの方から歩み寄ってくれることが殆どで、幾度となく助けられた。傍から見ると、  
私も中国人と大差なく映ったかもしれない。あくまで希望的観測である。

試験を受ければタブラ・ラサを量産する未来が頭をよぎったので、基本的に論文（日本の  
大学で課されるエッセイ・レポート等の課題を含む。基本的に3000~5000字程度が課され

る)で成績がつけられる授業を選んで履修していた。基本的に授業がない時はキャンパス内か宿舎のカフェで何らかの進捗を生むべく Word を立ち上げ、百度学術で文献を検索したり教科書や授業ノートを見返したりと、何らかの進捗を生み出そうと躍起になっていたのだが、読むのにも書くのにも非常に時間を食ってしまうため、一日に 500 文字以上書けた日は片手で数えられる程度だっただろう。しかし、言語は異なれど論文の基本的な書き方に変わりはなく、前期教養時代に ALESS 等の授業で身に付けておいた作法が非常に役に立った。基本的に提出期限の 1, 2 週間前に草稿を完成させておき、心優しい中国人の友人達や先輩たちに添削を頼むわけだが、忙しい時期にも関わらず、迷惑極まりないこのお願いを誰一人として嫌な顔せず快く引き受けてくれ、真っ赤にして返してくれた。当時の自分はさほど理解していなかったことだが、母語話者でない他人が書いた文章の添削は非常に難儀である。ましてや意味内容の伝達さえ覚束ない漢字の羅列を解読し、年齢相応の文章にまで訂正してくれた彼らには、いくら感謝してもしきれない。

以下に履修した授業とその概要、および感想を記す。興味の赴くままに履修していたら、いったい何を専門としているのか全く読み取れない時間割になっており、見た人ほぼ全員に「あなたの専門は？」と訊かれることになってしまった。おかげで東京大学の進学選択システム等々については中国語で完璧に説明できるようになった、はずである。

・ 农村儿童营养、健康和发展专题 (月曜 10, 11 限)

中国の農村における児童の栄養不良(主に貧血)問題や教育状況等の現状を概観した後、教授自身の研究を踏まえつつ、科学的・経済学的視点に基づいて既存の問題に対する研究・関与・対策の道筋を探る。期末課題は授業内容を踏まえて「農村児童の栄養、健康および発展」に関して何か一つテーマを決め、経済学ないし医学的な見地から分析を加えること。これに加えて任意課題として授業前のプレゼンがあった。生物学・医学の方面に予備知識があったことと教授・助教が非常に配慮してくださったおかげで、内容がかなり理解できて楽しめた。

・ 心里、行为与文化 (火曜 3, 4 限)

米国の心理人類学者、許烺光が提唱した心理人類学理論をもとに、中国、アメリカ(に代表される西欧社会)、インド、日本という現代における4つの大規模な社会集団の比較研究理論を扱う。内容が少し古典的ではあったが、学問というより「ものの考え方」をにおいて多く学ぶところがあった。教授の著書『心理文化学要義』<sup>1</sup>は読み物としても非常に価値のある一冊だと思う。中間論文はそれまでに学習した内容に基づき、指定されたテーマについて各自で自由に「思考」することが要求された。期末試験は「授業で私が述べたことの中で最も印象に残ったことを書け」「教科書を自由に評価せよ」の二問だけであり、駒場時代に辛い辛いと言っていた中国語の作文課題に心から感謝した瞬間であった。

・ 民族志研究方法 (火曜 5, 6 限)

---

<sup>1</sup> 《心理文化学要義：大規模文明社会比较研究的理论与方法》尚会鹏，北京大学出版，2013

社会学や文化人類学における民族誌研究の歴史及び目的を確認した後、実際の研究設計とそれに伴う倫理問題を解説するとともに、民族誌研究における基本的なアプローチ、および研究方案の書き方を実際に練習する。駒場時代に現代文化人類学の講義を履修していたので少しは楽になるかと思いきや、内容にも中国語にも非常に苦労した。研究方案、およびインタビューの方案を作成するのがそれぞれ期中・期末課題。

- ・中国民俗与社会生活（水曜 3, 4 限）

民俗学とは何かを、その成立の歴史、および中国国内の状況を概観することにより学習し、その後中国の民俗学におけるいくつかの重要なテーマを取り上げ、分析する。具体的なテーマとして、陶冶・歳時節日・姓氏・廟会、等。課題はインタビュー調査を通して「民俗」事象を 15 個集め、レポートを作成すること。地域に指定がなかったため、多くの留学生たちと交流する良い機会になった。アフリカの魔術やそれにかかわる迷信にまで触れた学生は、おそらく私一人だけだったと信じている。

- ・日本社会（木曜 3, 4 限）

外国語学院日本語系の学生を対象とした授業であり、日本語で書かれたテキストをもとに日本社会・文化について学ぶ。講義自体は全て中国語で行われ、日本語が母語である私は助教的扱いであった。

- ・中国民俗与文化（木曜 7, 8 限）

こちらは民俗学を系統立てて学ぶというより、むしろ外国人向けに中国の民俗文化を詳しく紹介するという感じであった。建前上は英語での授業だったのだが、教室内には中国語も多く飛び交っていた。学期中に 2 度課された、「中国の民俗および文化における〇〇について各自で調べ、述べよ」という小論文課題が非常に有益であった。成績は、これに加えて期末発表に基づいての評価。

- ・日本及日本人論（木曜 10, 11 限）

中国人学生向けに、日本に対する理解を深めることを目標として、日本の地理環境・歴史と発展・政治体制・経済成長・文化と国民性・対外関係などを客観的に概説する。中国人の視点から日本という国を見つめなおすことができる良い機会であった。10 人弱のグループで期中発表を作らねばならなかったため、中国語の強化にも役立った。期末論文は「日本に関係することなら何でも可」であり、3000~5000 字。

- ・中国环境问题与环境政策（金曜 5, 6 限）

大気汚染・水質汚染・土壌の劣化・森林破壊など、中国における様々な環境問題を、「原因→現状→解決方法」の順に解説する。また、中国における環境政策の背後にある理論についても触れる。英語での授業。評価は毎回の授業で課されるワークシートとエッセイ、期末発表。全て英語。

## 生活面

宿舎（中関新園 5 号楼）は申し分ない広さと快適さを兼ね備えており、また共用のトイレ

や洗面所、シャワー等も毎日隅々まで掃除され、何一つ不自由することはなかった。電球が切れたりドアのオートロックが壊れたりといった、定期的に発生する中国語会話演習の時間も含めて非常に快適かつ有意義な時間を過ごせた。一カ月ほど経つと、同じ階でよく顔を合わせる留学生やサービスのおばちゃんたち（注：これは敬称である）と言葉を交わすようになり、更に中国語を鍛錬する機会が増えた。

食事に関しては殆どを学食か中関新園のカフェでとっており、校外に食事に行くことはあまりなかった。これに関しては、学食を食べられる時間が決まっているので生活リズムが整う、という理由に加えて、4カ月しか北京大学にいないのだからできるだけ中国人学生と同じ生活をしたい、という私なりのこだわりも少なからずあった。北京大学の学食は質、量ともに満足できるもので、バクチーの刺激臭の強烈さを除いては何も困ることはなかった。むしろ、果物が日本よりも格段に安くて美味しいので、健康状態が駒場にいた時より格段に向上した気がする。

食事に関して、普段は食堂が混みだす前に一人でさっさと食べ終えていたのだが、互いの時間に余裕があるときはできるだけ中国人学生を誘って食堂に行くようにしていた。おしゃべりに決して支障がなかったわけではなく、会話の比率は私が2に対して相手が8程度であり、時々英語のお世話にもなったが、良い中国語の鍛錬になった。

日本にいる方々から何度も心配されたのは北京の気候であるが、中国共産党の尽力のおかげか大気汚染はさほど深刻ではなく、冬に雨が殆ど降らない北京の気候と相まって毎日が青空であった。むしろ個人的に辛かったのは大陸北方の乾燥した空気であり、慣れるまでは室内であっても唇や喉にかなりのダメージを受けた。体調がすぐれない時には決まって「しっかり水を飲みなさい」と言われるのだが、北京において中国人が発するその言葉は我々日本人のそれよりも遥かに重い意味を持つ。しかしそう気づいた時にはとっくに喉がやられて風邪をひいていた。そうは言っても留学期間に学業に支障が出るほど体調を崩すことはなく、健康面での不安は一切なかった。

## 留学を終えて

今回の留学で、中国語は勿論だが、それよりも精神的な面、および日々を過ごす中における意識の面で、大きく成長するきっかけを掴んだと感じる。予習復習に時間がかかるので授業のコマ数を控えたため、自分で自由に使える時間が増え、その中で「いつ・何を・どのように・どれくらいやるのか」を、自分の頭で考える必要性に気づいたからだと考える。

今だから冷静に振り返ることができるが、駒場で過ごした前期教養課程の一年半の間は、「人に見られている自分」や「自分が出す結果、成果」を意識することはあったものの、人に見られていないところでは「(自分で勝手に定めた)合格点を出すことができればよい」「現状を維持していれば結果が出せるはず」という、自身に対する甘えや妥協の存在を無意識の内に許していたという事実を、北京での日々の中で気づかされた。

具体的に言うと、「日頃の生活における一挙手一投足、振舞い」という言葉にまとめられ

る。例えば、「自由に使える自分だけの時間をどのように過ごすか」。それらをどのように割り振るか、自分が望む最高の結果を手に入れるにはどうすればいいのか、ということを常に意識しつつ日々の生活を送ることの重要性に気づかされた。

なぜこんな当たり前のことを今になって言い出すのか、と各方面からお叱りの言葉が飛んできそうだが、私にとってこれは高校の時からずっと模索し続けていた課題であり、それと同時に、目先の結果を残すことに拘るが故に、忘れがちであったことでもある。北京に来て、自身の振舞いを監視し修正してくれる人が、もう一人の、いわばメタ的な自分しかいない環境の中に身を置いたことで初めて明確に意識されるようになった、自分自身の課題である。薄っぺらな自意識と自尊心に寄りかかって、無意識に作り上げていた「これぐらいでいいや」という無自覚な甘えに、ここに来てやっと別れを告げられた気がしている。

#### おわりに

まもなく後期課程が始まります。今回の留学が自分の今後の学びにおいてどう実を結ぶのかは、ひとえに自身の、今後の日々の過ごし方にあると考えています。北京での日々を無駄にせぬよう、今後もよりいっそう精進していきます。

最後に、留学期間中、常に我々を気にかけて、支えてくださった先生方・スタッフの皆様に、この場をお借りして感謝申し上げます。